

「歴史という光は無情である。それは、不思議で崇高なところがあつて、光でありながら、そして、まさしく光であるがゆえに、しばしば、人が光輝を見るところに陰を投影する。それは同じ人間から、2つの違った幻影を作り出す」

— ヴィクトル・ユゴー 『レ・ミゼラブル』

はじめに

日本には、歴代アメリカ大統領に関する概説書はあっても研究上、もしくは一般の深い関心に耐え得るような詳説書はまだ存在しない。もちろん本場のアメリカでは『The Complete Book of U.S. Presidents』『The Book of Presidents』『Guide to Presidency』『Presidents Fact Book』『Facts about the Presidents』『Encyclopedia of the American Presidency』など歴代アメリカ大統領を解説した本が少なくない。

ところで中国史を学ぶ際に有名な書として『十八史略』が知られている。もちろん『十八史略』の内容の是非についてはさまざまな論があるものの、十八史を通読することは非常に骨が折れるので、それを容易に一覧できる形式にまとめた曾先之の功績に後世の我々は益するところが大きい。歴代アメリカ大統領についても同じことが言える。歴代アメリカ大統領に関する伝記研究は、大統領による差はあるものの、まさに汗牛充棟して余りある。また歴代大統領関連の一次史料の総量たるや天文学的な量と言っても過言ではない。それらを通読することは非常に多大な労力を要するし、筆者の経験からすれば莫大な費用がかかることは間違いない。本書の意義は、大統領について何かを調べたり研究したりしたいと考える読者がそうした労力を節減できるように、多くの手掛かりを与えることにある。そのためより深い関心にも耐えられるように、本文に加えて巻末史料を付している。

本書を執筆するにあたって上述の書籍の他にも非常に多くの先行研究を参考にしていくが、それだけにとどまらず、一次史料に基づいて独自の調査や綿密な裏付けを取るように心がけた。中でも『The Complete Book of U.S. Presidents』は、立項の際に非常に参考となった。しかし、内容の質と量ともに、アメリカで発行された書籍も含めて、これまでにない水準に達するように鋭意努めた。本書は大統領の政権のみならず、その経歴や政治哲学、血縁者など仔細にわたって論じている。もちろん従来の研究を参考にしていくが、それで足りない場合は筆者独自の研究による記述も含まれている。研究者にとってさまざまな研究の足掛かりとなるように努めただけでなく、一般にも分かりやすく記述するように配慮した。それゆえ、しばしば歴史の記述で陥りがちな固有名詞の羅列を避けるために、固有名詞の使用は説明内容に関連性が高いものに限り、できるだけ一般的な説明を採用するように努めた。

本書は建国期の大統領、すなわち第1代ジョージ・ワシントンを取り上げているが、建国初期の大統領は現代の大統領に匹敵するほど重要な意味を持っている。リチャード・V・ピラードとロバート・D・リンダーは『アメリカの市民宗教と大統領』の中で以下のように述べている。

「建国以来、大統領制はアメリカ国民にとって極めて重要な存在だった。共和国の初期の頃は、ジョージ・ワシントン、ジョン・アダムズ、トマス・ジェファソン、アンドリュー・ジャクソン、ジェイムズ・ボーク、そしてエイブラハム・リンカーンのような著名な人々がこの制度に対して彼ら自身の威信をつけ加えた」(堀内一史・犬飼孝夫・日影尚之訳)

このように現代大統領制を考察するにあたって18世紀から19世紀の大統領について検討を加えなければならない。すなわちそれは大統領制発展の歴史だからである。

2012年11月

西川秀和

本書について (凡例をかねて)

A 構成

この事典は、第1代大統領ジョージ・ワシントンの生涯と業績を論じ、大統領という人間をさらに深く知る目的で編まれた。論述の主眼は、彼が大統領となり、大統領職を遂行する過程に、生まれから成長するまでに獲得した経験が、いかに反映し影響しているかを読み取ろうとするところにある。

B 内容

本論は次の項目内容からなる。

0. 扉：歴代、所属党、在任期間などの基本事項に、顔写真、代表的な発言（英和）、および略年譜（年齢付き）を配し、大統領の全体像を一目で把握できるようにした。
1. 概要：生涯、業績を簡略に解説し導入部とする。
2. 出身州／生い立ち：生まれ育った土地柄および家系について説明する。
3. 家庭環境：親、兄弟姉妹について述べ、主に幼少期を明らかにする。
4. 学生時代：学業、学内外での諸活動など、青少年期の人間形成について述べる。
5. 職業経験：アメリカ人としての実社会での経験、政治に関わるようになり、大統領選挙に立つまでのことを論じる。
6. 大統領選挙戦：選挙運動、大衆、マスコミの反応、選挙戦術、対立候補、そして選挙結果について述べる。
7. 政権の特色と課題：内政、外交全般にわたり、いくつかの主要なテーマに分類し、大統領が主導した諸政策とその経過・結果を、社会・時代背景を交えながら詳述する。
8. 副大統領／閣僚／最高裁長官：政権を支えた副大統領と閣僚、そして最高裁長官について略述する。
9. 引退後の活動／後世の評価：大統領職を辞してからの活動、時代が経過してからの業績に対する評価について述べる。
10. ファースト・レディ／子ども：大統領夫人・ファースト・レディについては、大統領との個人的関係にとどまらず社会的活動に広く係わる場合が多いので、特別に立項した。ちなみに「ファースト・レディ」という呼称が大統領夫人を示す語として初めて使用された例は1877年3月5日の『インディ

ペンデント紙 Independent』である。

11. 趣味／エピソード／宗教：前項とあわせ、大統領の私的な側面を浮き彫りにする情報をまとめた。
12. 演説：大統領が自らの政治理念・思想を表明している代表的演説を収録した。英語原文に日本語訳を添え、冒頭に解説を付した。出典は、『A Compilation of the Messages and Papers of the Presidents』と『Presidential Messages and State Papers』である。
13. 日本との関係：大統領が日本に与えた影響や日本人がどのように大統領を評価したのかについて述べる。なお引用した文献中の旧字体は読みやすいように筆者が新字体に改めた。
14. 参考文献：大統領自身による著作を最初に掲げ、続いて史料集成、最後に主要な基礎文献を並べた（さらに詳細な内容を知りたい読者のために特に重要なものか、もしくは入手が容易な近年発行のものに限った）。英語文献は ABC 順（筆者名）で並べ、邦語文献は五十音順（筆者名）で末尾に並べた。邦訳がある場合は、原語が英語の場合でも邦語文献に含めた。なお復刻版の発行年次をそのまま表記している場合もある。なお「参考文献」はあくまで読者に参考となる文献を列挙しているのみであり、筆者が参考にした書籍は「参考文献」として挙げた書籍以外にも多く含まれることを明記しておく。

C 巻末史料

巻末史料として本文中では紹介しきれない一次史料を掲載した。本文中に（巻末史料 1⁴）というように表記し、対応させるように配慮した。文中の [] は筆者による訳注であり、() は史料の書き手による原注である。

D 総合年表

- ① 各大統領を中心としてアメリカ史の主な出来事をまとめた。
- ② ジョージ・ワシントンの生誕からその死去までを採録した。
- ③ 月のみ判明する事項は該当月の項目の末尾に配列した。また、年のみ判明するものはその年の最後に一括した。

E 表記について

- ① 本文内容を要約する小見出しを適宜付した。
- ② 地名、人名、団体、組織名、法規類、頻出キーワードなどに英語を並記した。英

語は文中の相当箇所へ挿入した。なお、人名については判明するかぎり生没年月日を付記した。事項に含まれる年月日については史料の差異によって若干異なる場合があるが、信頼できる史料に基づき比較考量したうえで記載している。

- ③ 1776年7月2日以前は「植民地」、それから1788年7月2日までの間は「邦」、それ以後は「州」と表記する。また1781年3月1日以前は「大陸会議」、それから1788年7月2日までの間は「連合会議」、それ以後は「(連邦/アメリカ) 議会」と表記する。
- ④ 政党の名称については、マディソン政権以前は民主共和派、連邦派の呼称を使用し、マディソン政権以降は民主共和党、連邦党の呼称を用いる。また本来、「民主 Democratic」という呼称は、衆愚政治の意味を含んでいたため蔑称であり、単に共和派/党と呼ぶ方が正確であるが、後の共和党と混同を避けるために民主共和派/党という呼称を採用した。
- ⑤ 「大使 ambassador」という呼称は君主制を想起させるため、アメリカではそれに代わって「公使 minister」という表現が使われていた。したがって本書でも「公使」という表記を採用している。またその他の官職名についてはできるだけ意識に努めた。例えばカーネル (Colonel) という名誉称号についても、カーネルという表現が馴染みがないために、判明する限り、「民兵 (名誉) 大佐」などと訳出している。
- ⑥ 「ホワイト・ハウス」や「ファースト・レディ」といった呼称は初期には使われていなかったが、本書では便宜上、それらの呼称を用いている場合がある。
- ⑦ 随所で引用されるアメリカ合衆国憲法の訳文はすべて『アメリカの歴史』(西川正身監訳)に基づく。
- ⑧ ヤード・ポンド法は次のようにメートル・グラム法に換算する。
1パイント = 約0.47リットル、1ガロン = 約3.8リットル、1ブッシェル = 約35.2リットル、1ホッグズヘッド = 約238.5リットル、1オンス = 約28グラム、1ポンド = 約454グラム、1インチ = 約2.5センチメートル、1フィート = 約30.5センチメートル、1ヤード = 約0.91メートル、1マイル = 約1.6キロメートル、1エーカー = 約0.4ヘクタール。

F その他

- ① 本書全体の表記を含めた統一および調整は、筆者と編集部が行った。
- ② 史料については、収集から構成全般にわたり、筆者が主となって作成した。それゆえ、すべての責任は筆者に帰する。

■ワシントンの時代

年	年齢	月日	できごと
1732		2.22	ヴァージニア植民地ウェストモラント郡ブリッジズ・クリーク付近（現ウェイクフィールド）に生まれる。
1735	3		ワシントン一家、スタッフォード郡に居を移す。
1743	11	4.12	父オーガスティン死去。
1744	12	3.15	ジョージ王戦争勃発。
1748	16	3.11	測量団に加わり、測量技術の実地経験を積む。
1749	17	7.20	カルベッパ郡の測量技師に任命される。
1752	20	7.26	異母兄ローレンス死去。
		11. 6	ヴァージニア植民地民兵の将校に任命される。
1754	22	5.28	初陣を勝利で飾る。
		7. 3	フランスとネイティヴ・アメリカンの連合軍に敗退する。
1755	23	4.19	フレンチ・アンド・インディアン戦争勃発。
		7. 9	モノンガヒーラの戦いに参加。
		8.14	ヴァージニア連隊の司令官に任命される。
1758	26	7.24	ヴァージニア植民地議会議員に選出される。
		12. 5	ヴァージニア植民地民兵の将校を退役。
1759	26	1. 6	マーサ・ダンドリッジ・カスティスと結婚。
1765	33	3.22	英議会の印紙条例可決により北米植民地各地で反対運動激化。
1774	42	9. 5	第1回大陸会議開催。ヴァージニア植民地代表の1人として参加。
1775	43	4.19	レキシントン＝コンコードの戦い、独立戦争始まる。
		6.15	大陸軍総司令官に指名される。
1776	44	7. 4	独立宣言公布。
1781	49	10.19	ヨークタウンの戦いでコーンウォリス率いる英軍を包囲し降伏させる。
1783	51	12.23	大陸軍総司令官退任。
1787	55	5.25	フィラデルフィアで憲法制定会議開催、議長に就任する。
1788	56	6.21	合衆国憲法発効。
1789	57	4.30	大統領就任、ニュー・ヨークのフェデラル・ホールで就任演説。
		7.14	フランス革命勃発。
1792	60	12. 5	大統領再選。
1793	61	4.22	フランス革命戦争に関して中立を宣言。
1794	62	7.	ウィスキー暴動勃発。
1797	65	3. 4	大統領退任。
1799	67	12.14	急性喉頭蓋炎で亡くなり、マウント・ヴァーノンに埋葬される。

アメリカ歴代大統領大全
第1シリーズ 建国期のアメリカ大統領 第1巻
ジョージ・ワシントン伝記事典

目 次

はじめに	i
本書について	iii
1. 概要	1
海岸地帯の大農園主の子	1
独立戦争の英雄	2
2. 出身州／生い立ち	2
ヴァージニア王朝	2
騎士の末裔	4
3. 家庭環境	5
無二の味方の父と憧れの兄	5
母親との確執	6
父母	7
兄弟姉妹	8
4. 学生時代	11
家庭での教育	11
「手習い帳」の内容	12
5. 職業体験	13
測量技師	13
民兵隊を指揮	16
ヴァージニア植民地議会議員	25
大陸会議に代表として参加	31
大陸軍総司令官	34
憲法制定会議議長	81
6. 大統領選挙戦	87
1789年の大統領選挙	87
史上初の就任式	89
1792年の大統領選挙	93
7. 政権の特色と課題	95
主要年表第1期	95
主要年表第2期	96
連邦議会会期	97

数々の慣例を作る	98
大統領官邸	104
権利章典の採択	105
各省の創設	106
1789年裁判所法	107
公債償還	107
フィラデルフィア遷都	109
第1合衆国銀行創設	110
スートカ危機	111
ネイティヴ・アメリカン政策	112
ウィスキー暴動	117
フランス革命戦争に対して中立を宣言	119
党派対立の深刻化	123
その他の外交	128
その他の内政	129
8. 副大統領／閣僚／最高裁長官	133
副大統領	133
国務長官	133
財務長官	135
陸軍長官	138
司法長官	140
郵政長官	141
最高裁長官	144
9. 引退後の活動／後世の評価	147
9.1 引退後の活動	147
農園主の生活	147
再び総司令官就任	148
奇妙な遺言	150
莫大な財産	151
遺言で奴隷を解放	151
埋葬地をめぐる論争	152
ワシントンの墓所に詣でた日本人	152

9.2 後世の評価	153
神格化された建国の父	153
同時代人による評価	158
肯定的評価	159
否定的評価	160
総評	161
ランキング	161
10. ファースト・レディ／子ども	163
富裕な未亡人	163
マーサの子ども達	165
レディ・ワシントン	169
政権終了後	172
エピソード	172
11. 趣味／エピソード／宗教	174
11.1 趣味	174
多様な娯楽	174
服装に気を配る	176
11.2 エピソード	177
ジェントルマン	177
偶然の出会い	177
友人の妻への恋文	178
義理の孫への恋愛指南	179
ノーブレス・オブリージュ	181
星条旗の誕生	182
財産よりも大事なこと	182
さまざまな入れ歯	183
全米各地に名を残す	184
敵将の獵犬を返す	185
ヨーロッパ連合の結成を予言	185
心憎い返答	185
使われなかった第1次就任演説草稿の行方	186
友誼に報いる	186

ワシントン記念塔	186
甥への戒め	187
服を盗まれたワシントン	187
ワシントンの暗号	188
自ら非を認める	188
潜水艇の導入を検討	189
ユーモア	189
ジョージ・カスティスによる回想	190
ヴァージニアの天然橋	192
芸術観	192
若者達との交流	193
喜劇のような場面	193
時間厳守	194
蛭を飲み込んだ蛙	194
二院制の利点	194
奴隸制観	195
ネイティヴ・アメリカン観	197
榮譽	198
11.3 宗教	198
理神論的信仰	198
12. 演説	202
13. 日本との関係	205
話聖東小傳	205
戯作の主人公となったワシントン	206
理想的な政治家	206
修身の教科書に登場	208
14. 参考文献	210
巻末史料	214
総合年表	303